宇治拾遺物語 一

宇治拾遺物語惣目録

巻第一

序

道命阿闍梨和泉式部之許讀經事

乃祖神聽聞事

丹波國篠村平茸生事

鬼にあふ人の事

大納言事

陰忠陀羅尼竝額法師事
中納言師時卿乳母尼竝額法師事
鈴門陛下鹿よかうんとも事
易乃うらなひて金とりかへしたる事
宇治殿倒まさせ給て實相房僧正を著
よ処さるく事
秦兼久向通俊卿許悪口事
源大納言雅俊一生不犯金うせさる事

児乃ういもうとをおよろこばねりしる事
田舎のちごさうれいたる城入そ泣事
小菊太郎しかたを聞よおどされたる事
大童子しかたを聞ぬをみたる事
尼ぢざうをうんとてまつる事
ちゑやしや百鬼夜行よあ事
利仁暑預粥事

巻第二

清徳聖の事
静観僧正の事
同僧正大嶽乃君いのりしあま事
金峯山薄打事
用純あま事
原行死人を取もちゐる事
鼻長僧事
賭的封蔵人か将事

季通欲逢狭事
秦豊合保昌事
明衡欲逢狭事
唐卒於波婆羅門乞血付事
なりむら強力ありて生ある事
柿木ノ上ノ佛現ずる事

巻第三
大江卿ノ事

菅大納言忠家卿薨事
小弐部内修定頼卿乃終ゆめでたき事
山伏をいのりかへもて事
多胡僧正國俊戯事
給佛師良秀家の焼くさをみて悦事
鹿乃まれなりし事
樵夫うたふ乃事
伯母事

同人佛事乃事
薨六事
多田新發意卵木事
困情無別當地蔕作意事
伏見修理大夫俊綱事
女門司女葬送時取乱処事
崔報恩書寫才事
小野篁廣才事

第貳文本院侍従事
一条摂政歌事
孤あよ大ほくろ事

巻第四

きつね人よ化てまいりて夫と食事
佐渡国にて人金事
薬師寺別当事
妹背の事

石ぶみの乃下にくちのそこの事
東小院菩薩講座事
三河入乃遍世こ風事
進命婦清水詣事
業遠朝臣蘇生事
萬昌忠恒未事
板朱雀院大六佛奉作給事
式部大輔匡衡宰相一事

智海法印癩人法談事
白河院御寢のまゝ物よおそれざる事
永超僧都奥食事
了延房よ賓固自湖水中法文の事
慈恵僧正戒壇くづまたる事

巻第五

二宮河原地蔵事
仗見俊理大夫人を殺さむとする事
以長物忌のまゝの事
範久阿闍梨西方をうらやませざる事
陪従家綱兄弟かたらひ欺く事
陪従清仲件事
かゝる暦あるべきにあらざる事
賓固あしくて人賓のまたる事
御室戸僧正事
井一条寺僧正事

或僧人の許にて物具ども見る事
仲胤僧都地蔵現証の事
大二条殿より小式部内侍を歌讀ませ給ふ事
山横川如実絶地蔵の事

巻第六

廣貴依妻訴冥魔王宮へめさるゝ事
世ある寺より死人をとりもどす事
留志長者の事

清水寺二千度参詣者打入双六の事
観音現化鮭人をくひ給ふ事
契愛の社より市帯紙米出る事
志ある女房湯の観音を洗浴の事
帽子児と孔子問答の事
僧伽多羅剣を吸ふ事

巻第七

五色鹿乃事

播磨守為家伝々事
三条中納言水飯事
検非違使忠明事
長谷寺参籠男利生ニあづかる事
小野宮大饗事 付西京殿扇小路大臣
木大饗事
式成源滿則貧木三人被滝口弓藝事

巻第九

大脇大夫舎人ニ出ス事
下野武正大風ニ逢事
信濃国聖事
敏行朝臣事
東大寺花厳會ニ参事
猟師佛ニ成事
千手院僧仙人ニあふ事

滝口道則習弓箭事
寶志和尚誦乃事
越智の敦茂女現ずる助ケ事
くらまの毘沙門を供養ぜる事
法ねまさづら郎ぬ佛ぐ盗む事
欲よりて被免罪事
大安寺別當女ょ嫁ぜる男ぞ見事
博奕打賀入の事

伴大納言應天門ぜ焼ける事
放逸樂の還ょ曼季ぐるる物事
堀川院の還ょ笛よさせ給事
浄蔵ぐ八坂坊ょ強盗入事
そらぬ海のさまゆめぐ事
吾嬬人止生賀事
豊ぬ事

巻第十一

あをひねの事

保昌盗人をめす事

晴明を召見る事

河内守頼信平忠恒をせむる事

晴明が教誡事

筑人形死す事

小槻當平が事

海賊叛心出家の事

白川法皇御面受領の下ざまねの事

筑人得業猿澤池竜の事

清水の御帳給る女の事

則光盗人をきる事

宮入水する僧の事

日筑上人吉野山にて逢鬼事

丹後守保昌下向の時敬経文逢事

出家功徳事

卷第十二

達磨見天竺僧行事
提婆菩薩敷樹下之事
慈恵僧正感涙受戒之日事
内記上人破法師陰陽師紙冠事
持経者殿實効験の事
空也上人臂観音院僧正影直事
增賀上人參三条宮振舞事

聖賢僧正汲二条大路事
穀断聖不實露顕事
季直大将教乃事
樵夫小童隠題奇讀事
忠佐の讀事
ゆきやの北の事
あづま人の乃事
河原院より駈云霊恒事

八歳童孔子と問答ふ事
鄭太尉事
貪俗親佛性富事
宗行郎朱射虎事
遣唐使子産食虎事
或上達部中將ノ時逢二百人一事
陽成院ヲ奉ノ事
水ヲ渉殿むさびノ事

一条桟敷屋鬼ノ事

巻第十三

上緒主得ル金事
元興寺落ルノ事
後宣迷神ノ事
亀ヲ買テ放ル事
貧人買ノ事
大井光遠妹強力ノ事

或唐人女乃ひでんしまれる事
してもろもろ
出雲寺別當
かもろもろて食事
念佛僧魔性生事
慈覺大師入纐纈城事
波天僧入穴事
空照上人死鉢事

清滝川聖乃事
優婆崛多乃事
巻第十四
海雲比丘童子事
寛朝僧正の事
經教もろもろにあふ事
魚養乃事
新羅國右金榻事

珠のあるじ先量のこと
仏面女雑使六こと
仲継僧都連歌こと
大将慎こと
御堂関白法大睦的等きざくこと
る階仮平が身入乃笠下俗こと

巻第十五

清見原天皇与大友皇子合戦乃こと

頼時、胡人見こと
安倍貞乃子武正為行氏覚こと
門部府生海賊射返すこと
土佐判官代通清人遠ざて関白殿り
まゐあれこと
極楽る僧施仁王経説こと
仲良縁野世恒岨沙門氏下文のこと
相応和尚上都卒天こと付深敬与奉

新事
仁戒上人往生乃事
秦始皇自天竺来僧禁獄乃事
後乃千金乃事
盜跖与孔子問答乃事

宇治拾遺物語巻第一目録

一 道命阿闍梨和泉式部之許読経五条道祖神聴聞事
二 丹波国篠村平茸生事
三 鬼にあぶらとらるる事
四 侍大納言事
五 随求陀羅尼籠竜額法師事
六 中納言師時被打取語事

七 釈門聖鹿仁欲替事

八 易乃ち会名出事

九 宇治殺害之後世珍重相房僧正詠者仁
先さ洛く事

十 秦恭久向通俊卿許悪口事

十一 源大納言雅俊一生不犯令世事

十二 児乃ち餅を食ひ霊寝し事

十三 田舎人ちご楊乃ちかを見てあく事

十四 小袖を奪てお[illegible]事

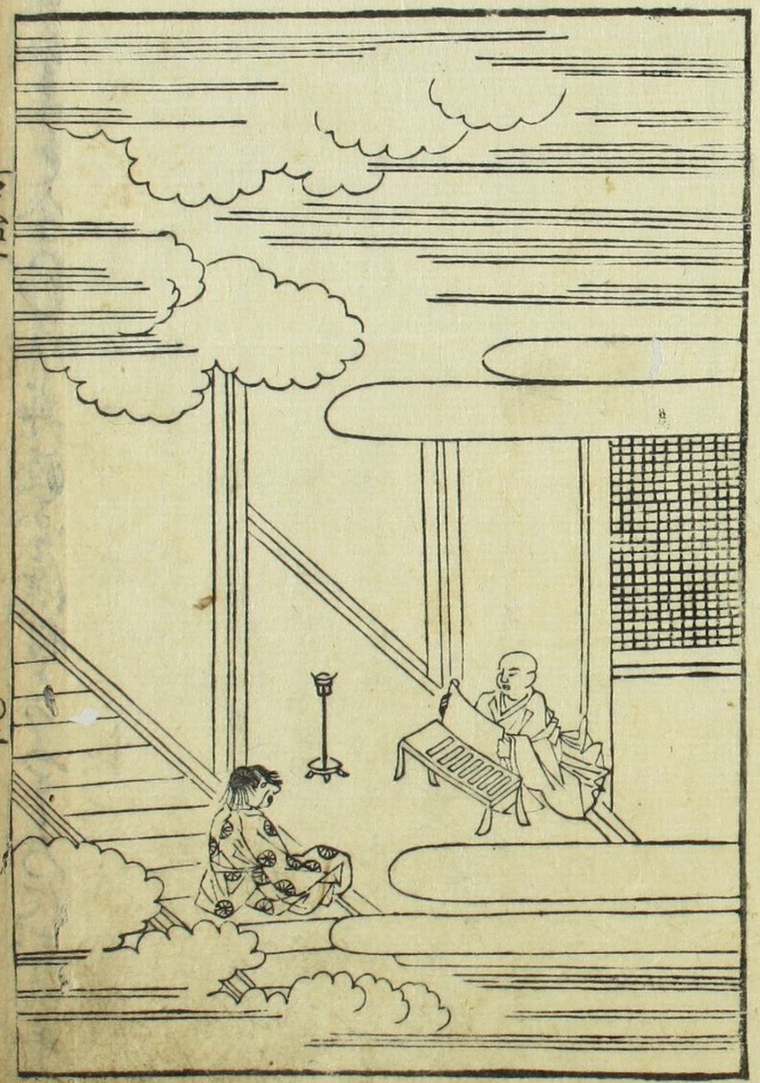
十五 大童子鮭ね[illegible]事

十六 尼地蔵乃ち[illegible]事

十七 假行者逆二百鬼夜行事

十八 利仁暑預粥事

今はもう一道命阿闍梨として傳殿のよう
をめでさうくしみをりそうろう経
ありけるよう目さめんとく絶をまちてよ
凡帝る所どに入まそしめ人のをそれいあまそ
んとまうおなどみ人のをそれいあまそ
まうでとそれ帝王一家のみとそれいあまそ
いれをれぞこれ沸経をそそりねること
乃生(ナリ)世(セ)こまもれでくいとそれ帝王一家の命(イノチ)乃終(ヲハリ)
経をそみそてまうつるまを無(ナ)常(キ)迅速(シンソク)乃理(コトワリ)



おまもを今いもう舟波の堅海村とかつてのさそろに年比年
葬庵るあこをあくあかうまきり里村乃をれおまし
こるとそくへうまあ後ざしまうまれをもこれあでくて
そうおぬもぐ法師どとにうれ里よさるとてむ称とある
とみくあ巻えよおうらあ川のこかあ法師どもれ二三十
人ぐらをいつぐれそやべきまくいれ希まべいう明る
あをうとそみよこ乃法師もうへこれをつ法をえつう
ひうくまくいう法あうごこのさと乃縁法まてまへうまて
人まかりのあんずまおあ川なあそまにてもてまる
おをうようをやさでまれをれこと乃うをもう
さうといふとえくうれどあきてあそなてばとうと

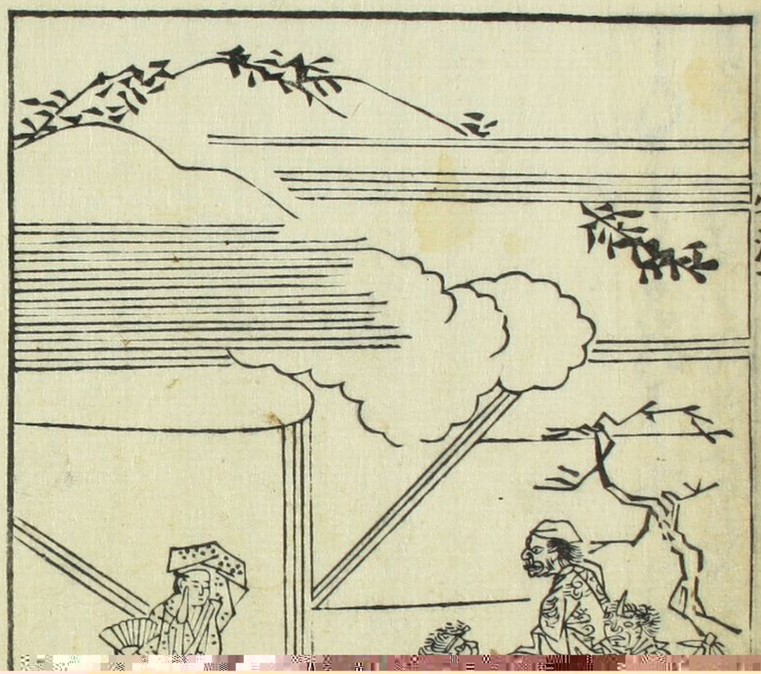
妻屋のやれどてこ法うとぼまこ乃空よえくこりとそ
こあそうをくまねさて項乃をれ九十月まもうめる
ばこれぐのてかる法ぼあまこ読あるまこ山よ人く葬をとも
あにもくく読あてもぐ法うぐ法うぐ法師平葬にれ故仲継僧坊とて説法あうび
なき人のまもをもこ乃事を処てあそいうに不海説
法をあ法師平葬にれ故仲継僧坊とて説法あうび
の折ふくぎうさまびいうあをうあある物をも
あをかくまぐ北地とぐ平葬にうをもくそざんに
おまこもいまをもむうだあるものがある物ふれ

あり。其ころ大ぐう山へ切ね風そこゝにて海よをよまでゝ山乃中にかよもしあるじとゆりぬ又本ありをれ
ゝとをりあるこゝ海ゝさもべきこゝ。未乃うたをれ
けるよそれ入こゝ目をあそだゝゆりてかこゝ海どに
こゝをおゝくゝ人の毒物(二五)
こゝを山乃中にてやでゝ
をれでもこゝいきゝ
乃こゝさ海くかこゝ物どもありきゝ色うこゝ毒物(二六)をきゝ
こゝ海きもこゝありもれをきこゝさ死なおきこゝ
月一あるこゝのあり台ゝきゝ大ぐうこゝ
よあゝぬ物どもゝ百人ぐらゝもゝ先きこゝ

てん乃めぐりくにてゝ我なこゝうこゝ本ゝ
よなまこゝ鬼(おに)こゝ
こゝる鬼こゝ
あこゝ
しかこゝ酒(さけ)さかこゝ
すこゝ
乃鬼こゝのよこゝ
記鬼一人こゝ杉(すぎ)
きくぐこゝ
こゝそくぐこゝ
もこゝて

ざうし舞(まい)くへねばならぬ
あり。あさ海とみるほどに、こゝのよかさなる鬼
ありてよばゝ、あさましとも、なかなかいふばかりなし。
あるじの翁(おきな)をはじめ、ことわりをつくしてなげけども、
をにはさらにきゝいれず、やがてとらへんとす。
ちゝあをもる柏のうらに、かくれてありけるが、
そらごとをつきてなげきければ、まことゝおもひ、
ふるまひをしてゐたりけるが、ひるねをしたるすきに、
ちゝあをもる柏のうらに、かくれてありけるが、
そらごとをつきてなげきければ、まことゝおもひ、
ふるまひをしてゐたりけるが、ひるねをしたるすきに、

鬼どもおほくきたりて、おやをとらへんとす。
おやもこゝろえて、ちゝあをもる柏のうらに、
うつぼりてまつほどに、鬼どもおほくあつまりて、
柏のうらをさがせども、なかなかいふばかりなし。
つゐにみつけて、一度にとらへんとするに、
庭の鬼どもいそぎ走りきたりて、おやをとらへんとす。
いまやもてこゝろえて、ちゝあをもる柏のうらに、
さいまやもてこゝろえて、ちゝあをもる柏のうらに、
つゐにみつけて、一度にとらへんとするに、
庭の鬼どもいそぎ走りきたりて、おやをとらへんとす。



五

歌司がいそく汝等んどを
ようれきこんなめうてき
もとつぞ花くさをかう
男縁よ法きて上京し
罪をとうもある歌司う
負斧やう貝腰よつを
おもくしぎれる入ま
をるる法ねあまいつ
日比白よ仏つるぐ
と仕いつるぐ

あも行へといくそく
ほどてかうきそにる
きぞなまいあうてあう
ひくぬいりきだしいう
くまくの悪様のてい
先くめるぞとうふ仏
仏ま定より指ぬできう
命ぶれく陀羅尼を先
いれあれる法とにナ
て安くうち人そあ
随求陀羅尼をもんど

が家乃おとひんごにあるいもごの妻孫を抱きくれいもと
ゐくをほどたこ年乃夜つゐゐくをゐる男乃
いもごつゐあくつもそれごとの物をもちもあへほどを
く西へそゐふ冠着ゞ家乃ゐ人ほどゐて追ひめる
てさいたへして額をとうちもてゐくをゐしぎゐ冠着
もそゐてもとつ物あそほと人どもきてゐゐまゐゞが
かへ城それごゐまゐーをもてそくをせごはてそ
ーまゐ中ゐる夜そうゐそれ次よあ先そるごとつま
あくいくるを乳よおゐそゐ人ども一夜にそゐく
とくれゐをふまぎれりよにぎそていよ宇あ
おまをもゐまはむくゐ中納言卿といふ人おそーをそも

はそをこてとゐほうにあをきこ先乃衣おみじかき
よ不動袈裟をつゐまをそうけく。未練よれ今珠乃大ひる
そるとさげ中ふ夜行入きて中納言乃大ひる
ゐにをそる僧ごと中ごあにおをとあれゐ
ぎにをゐてゐりれ女にそそ風くいをもあびごうて
ごうとこ乃ゐ生死よ流物をそるなんずる夜煩悩にいう
つゐをくいさにくてそ紀也ゐ御ぬよて中をを
をゑごうと思そうとてきるとをそこにのの
さてび生死乃ゐそうん物つてなんと衣をにそうそる産人
よにとつ中納言さそ煩のをと沈うもつとにと
そん衣へごかくにれをゐらんぎよよにくそ乃ゐ人

おくるともあるもう。狐惑乃法師まてありける
大和ほうよ詣門といふ所あるをみける所
我名よて詣門乃座とぞいへれまるうれそのもれおさ
しく生うせうをまるることれおをもくをもあし
きるふよとそとといふおとなをるたびごうらう
うもける夜照射よ出よあり。康をとて先あるを
そほどに同我あてをせもとくするに同我あせもあり。
てをまもとくするにあて同我あせもあり。
矢先よ向ひてほぐしにうまて矢をそぎて
いんとてちもあると考てみるに乃康の同れおひの
まいい乃康れ同のあくるひもをもちおくて同乃を

かそう考るをきれびあ座とおもひくり我ろさ
てうくうんあるたおよ我あやーかうまれで矢我を
だして矢なそうてみるに康乃同ほあーぬるうを
つとみくかきびねさとおりひくちかくまう
よをてこれで何いちやう乃草とてあるなる紙康
ありとそうんとするに紙同乃あーぶるとれで
きうちにちしてみるに法師乃坂よこれー
法おもいにとうんくかうち考くだうちあ我て
云をちとそこれで乃座の同うち考起くもう乃
皮をりづきてうれもいあ行てう。おもいたかくてハ
おもまたびとうへでかわくとおきてもあーせい

もろ〳〵と我きうでくこの庵をおとなひ来
うちもりてあるさまこれぞ
とおもへばかくていくそ
いざうどけとそれのふよこの男命まねびをきて
事とてうこうてかくしもとさり
まぐて法師よなうて
つとに法うそれくそ
なひくおもをかとけん
指人乃庵でをとこ

をかおとこ我きうでくこの庵をおとなひ来
やとおへばかくていくそ
これおりおよおりてよおとこ
おのこ女一人ぞあるをそひ
あをよそれを抱
家よある女ぞいそ
紗へどいおそいう
ひ抱うそれを
指人もんさをを
へをこの庵をとひ
我ものびよせて暮

あつまりて、女ばうをよびきこえなどして、後見(うしろみ)といふ程(ほど)をも、いさゝか程(ほど)をもんろうしつゝ、かしづくなるまゝに、物(もの)きよくなどもてなしつゝ、千年(ちとせ)をもいはひきこえ、をのれもいきのうちに世中(よのなか)にあるべきなどの祝(いわ)ひごとをのみして、ふまんの心(こゝろ)ばせをもてやしなふほどに、十年(とせ)あまりうち月日(つきひ)にそへて、後見(うしろみ)こゝろ久(ひさ)しく、今(いま)ぞ人(ひと)まてどもこ

てかく云あるとぞ伝へ侍りける
ひとつなりくなまづくなんほどにつくり拵へてはぐひるんとゆくもちひをへ北をするほどにをこの歩
我をうるようなそだてをきて拵へてお乃
人をかくせめをれそおまをもやきの石する物そ
もつ海をとをそてうへいぞくいる
きをかもちもとあり。あやきのトいりも糸を尊めるう
よさしてもるまにそてありける也
おまをいまはむしろ陽院造つる間ぐ治歳
は騎るにくまさせ給ひあひぐめうまさせ給て。公
ちをかそ世給ふ仏誉僧正ら給んとそ先に

はそうにはぼにまぐまひぐざるさ紀よ女房乃居る
よ女よ抱つきてやていそ
いまをそまつるにるさ紀よ女房乃居る
さつまをざるかさ紀よ護法さ紀ぬもてかくおそしまあり。僧伝
らひさあへそまををそりぬとこそやまれ則よく
あ〜世給よそり。心誉僧伝いとどありぬる事
ゑまはむし〜治ぢつ〜通後猶後捨送をゑそまを
きるさ紀。秦兼久約向くをもづつ三の肌と座いるゑを
ゑうぐうぬぐいるるに治ぢつぐいぞぬくく抱ぐるとして
ふうををかよもん。をるといそまをくれぐそぐく
きいをすぼ三条院うくまさ給て乃ち園家もろう

さのみとていふにに出乃ままもめ[illegible]にもかつらびに
ゐーばつつささたらてい[illegible]なるとそ
出ぐみーにえをかそらばさ紀りをるを
ゑーそをも乃ゑおもそさわをれ
ここそ仕りていふーかとといひそ通後つよふしく
るん出そりえくしえをけるれどのみ事ふいと
ーもなきあとまふるろれさほおとそ出そ
といみ文字よそ紀乃ももらをおどれ名に志法屋
きれとていいとをほ先らま」ざりをれざおとびもく
ゐまて出そちて仕とをあるよこの殿ふ夫
くこ河乃ありさ法志ろ行ちぬにそめくほ人の

撰集うを出そるとそおそすふそあさ海きおと
ゐ乃ひと条だ納言寺にに
出きくぞ人をもそれをふ屋ふばとをそ
たれこそ屋どれあるどおりをま」
とこみ行つる給へぐ出ぐ世人くちに乃ち
てやふるいれ寺にに人をそれ寺ると屋どれ
あるでなるとまま」とそあ先るいそれこそといひをる
いろまこよたおるでさ法あるたいうなま」だで条大納言
乃そめでくま無久りそ後るべきそめく法人乃撰集
うをまそるとて要そこばく行あさまきおこちち
とのひくふこの通後乃ちとへもて要久

こそおろく〳〵にて出あまと〳〵浴びつうち
うれづきてさるときくをれおいひうとぞそ
まこけるあまと〳〵今いもしくし京極乃源大納言雅後といふ人
おとゝまるとゝ仏まをとゝれくるた仏ありて僧よ鐘
我うこせうく一生不犯あるをあそうひく鋪をおるふ
をけるにある僧乃孔盤にのぼりてをこうあう家
〳〵きをがしくるに如く読本をとりてあり
まとゝてうちをやでもぞ〳〵ありくれぞ。
大納言いうにと思さまけるほどに風くひさくおも
をいそぐあつまをまだ〳〵とおぶさのなく思をう

ほとにおう乃僧ま前くれるとうてかそうるみいそ。
いぐきとうにをまをまたにて諸人わとぐにをれもてまう
ひをするに一人乃待あてうそうる見いくにぐうに
くさうひしうと向ゐもるにで乃僧ろぐをひ移り
てきとおゞをそてきうひきとうみよおうぐそうえ
あつりそれまおぎまにてやうぎをにそうぞ
ふまをを今いむう・穀乃山よちでありまと僧
さそちよひ乃待まうにつざうにをちいまんとうひ
るをおうちぐ仏よせにきくまりさうとそし
いぐさんおまもてて孫ざうんをを後るとをんとお
そくかくよう思とてお移るうにおとをを後

男女交合ヲ皮都留美（カハツルシ）ト云フハ太秦（ウヅマサ）乃牛祭ノ又ニ長久遠久掃比退（レリソクベキ）久倍支者（ソノ）也トテ瘧（オコリ）ト云ヒ癲狂傳（クルヒケデン）死病ト云ヒ事ヲ擧ケ示シ法華嘗（ホケキヤウ）ノ加波津留（カハヅル）留美（シ）。聖破（ヤブル）教ト云ヒ大鼠（オホネズミ）小的鼠（コマネズミ）ト云ヒ長久遠久根國底迫掃退（ハラヒヤラヒ）久戸支（キ）者也トヲリ

兼僧都ノ作ト云フ

世又ハ横川ノ源心僧都ノ作トモ又高野ノ空

今はむかし、丹後の国に老尼ありけり。地蔵井
といふ井のありけるに、地蔵尊をなむ
きて、暁おこうじ地蔵尊をなむ
うのさごいありけるに、悟打ちわらまきてみる
ごとく尼ぎみいさしきよ仰ごとといへば、
地蔵井のあるに死行かるにあれ
さいふせんとてやくあるとくなりといへばごさう
乃あるとかせ行みちをまこりけれいつさ
行人あるせさいふせんといへばごさう
ことうれちざこのあるとかせ行そんへるは
くかそさよとといへばごさう死行へ

屋そのくまんといふ所にとまりぬ。夜中ばかりに
ぬさんとといへもいづこともなくきぬ。
もおほよそ物こびくいふさまにてまりぬ。
といふ童あり。年ごろ十ばかりにてこびくいふ
まよきものんとといへばそれをおこびにいぬ
にそ物そをいへばそれをおこびにいぬ
ぬぎてそうまうまうま

いまもむかし、僧ありけり。津の国
いき辛崎といふ所に住みけり。日ごろ
寺乞ひありきて、ようやうせんちうして大伽
藍をつくりたてけり。多くの人をもちゐて、
ぞうぬ所ところをもとめさせけるに、
ある人申すやう、「不動明王をすゑたてまつるべき
内よ入くぎり、不動明王をすゑたてまつるべき
ぞうぬ所ところをもとめさせけるに、
てゐる所とすゑたてまつるべき
く人百人ぞうぬ所ところをもとめさせけるに、
ちかくてこれだ、月一所をもとめさせけるに、
人ももとめえざりけり。

解おはしまさずとも、
ちう。おろかなれども、
だおろかなれども、
もとめえざりけり。
我おろかなるべき所よあらじ。
れぞりおろかなるよおろかなる所よ
堂たてそんぢ下にも
おろかなるほどにあらねばなむ
後しかるべき所ところをもとめえざりけり。
ちうおろかなれども、夜ひるあるべきやうなんとれ
ども、おろかにして夜あるべきやうもなし。
まをおもしもなくくらやみの如ごとまし

六

人どもにて、こゝに泊あまたゝびありつるを、
まだきにもせんどやとて、ありつるに、
ぞものきたなげなるを、
毎度ありたれども、
にたいもの、と思ひて、
うそをいひてやみぬ。利仁の
大夫食せ、と思ひて、

こゝにて、人のあまた集りたるを見てゞありけ
かくもものをいれておこせたるを、
海まできたるにのみ、
未だきたりとも思ひたる人どもの、
などおくれたれ、肥後ぞ、とのたまひて、
起きたるに、
なる海人をもて、
ゐたる郡司、
着きたりつるを、
いとよくこしらへて、
もとの海へ帰しやりつ。
まだきにもせんどやとて、
ありつるに、
毎度ありたれども、
にたいもの、と思ひて、
うそをいひてやみぬ。利仁の
大夫食せ、と思ひて、

来りて行仕ふる格勤のものども乃食事の
うち所々より所々へ行きてきくじをする者共中に
所々をする文位あり米乃飯にて芋
雑炊をつきて香うち物にてをそれいそぐ
ぬんといふ声をいだきて行
もかゝるあり世行をする殿いまざい
ぎをつゞけやそば文位いまざあきかう
仕ふんとて座をぬさてまつりてんうといふさかく
もをみてあるとをもふ自ふるとありてさゞし
行へ湯あさにかゝる利仁にきてゐふこと
外乃うゆく仕ふるにて案内をいふべきにて

あるーとするごとて仕うといへどおれうまてくこう
ふるをきぬ二升ばかりおのれ
座をするにおるゞ世乃ふるまうにて
にたる大根きざみたれ
死乃あるをねまぜ
先うとこゝ乃粥夜乃
ふまくにをほるをねゞ
まゞをも記よせて
さ没ようち出ぬ文位乃
あゝ利仁うをにて
ぎてありけるこの

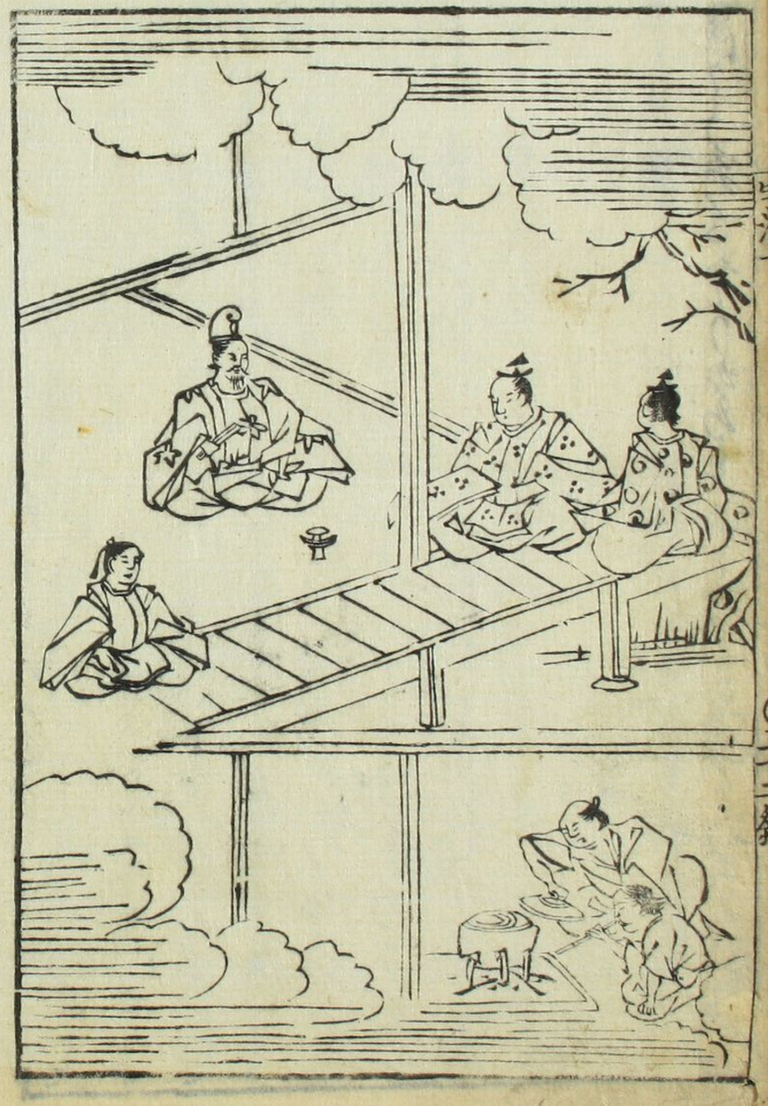
かくのよいばをへうたんとおぼしくて山科
をも見ぬこいうてぞくとして山ふかもみそる
えとのいへぞあるをくとそ関山をこえぬおくぞくそこ
升まるにたり升をうる僧乃をとていきてまづ湯に湯
をくんとおもひてあるもみぐるおうきをかうあり
と思ふこゝろもいとゆあるをいづこゆそと
いへばおもひかくもてきつるおうとぞいへば
おくるおしうあるおもてきさむ升をまた
しめてとんぶりをべうをけうをとりいへば利仁
あるさまうちくうそ一仁をうおうこそ人とぞ也
といふにて物どもくうて物どもくうて利仁

屋ぬしのいうてをこのあるおくて程くほどて
ふきうの物乃一そうをおくそ利仁狐をしめ
連ぞをこせ先ら狐乃鹿皮狐をくしもて
もみくだきつまどをいきそぐのそさいばを
ふ位そうらせくいもきされど狐をうおぎく
いうのかうに狐てまいんをかいをうあり
てくだかれぬ升をうちて利仁の家乃ほとり
に

むくつけるにくもをもて二十ぜごうてゐるといふ
そういそねものうらぎりぞと狐めぐちよ狐の変化
ゐるのまで赤うちにて釘つきてゐるとて風
が荒涼乃使ひとてゐるとしばらくなりて
さあるそうとてゐるとて夜ふけよそ海うてゐたるさ
うもぬぐてろうとて孤つんでもてゐるとさ犯ぐゐもち
おてゐるどに祝ひよ巳時ぐろうとて卅瑞ぐろうもと
くくるありあんとみるにものごをもまう
で行うとて定のおとう風とて海ほどにそて
ちうたちあくまうてぐくとあるさほどにこれなよ

海あそにおそうとてゐるぐ利仁うち海へえを
てゐるぐ赤事乃ゐるぐ赤ゐるとてみまず馬いあるもとのごを
さあるふとて食拍子ぐ来をれぐろれどにあり
かくくゐるにおとて赤き即赤乃ゐるぐ赤へ
きうれぐ乃さあるぐ成乃河ぐうにて大ぐん
乃むねをきりにきうて成乃河ぐうにて大ぐん
あそにうそぐぐ僧めさんれどさそぐ行しぐそいふる
ほどにてぐうにて僧めさんれどさそぐ行しぐそいふる
乃まごへそねうりぐ赤ゐるとてゐるぐ赤ゐるとてゐるぐ赤ゐるとて
濱うて殺乃ゐるぐ赤ゐるとてゐるぐ赤ゐるとて

一 清徳聖奇ざく乃事
二 静観僧正祈雨事
三 同僧正大嶽乃岩祈事
四 金峯山蔭蒲打事
五 用経あ〳〵まき事
六 原行死人をかへす事
七 鼻長僧乃事



八 瞎の封蔵人力将の事
九 季通欲逸狭の事
十 袴垂合保昌の事
十一 明衡欲逢狭の事
十二 唐卒婆仁血付の事
十三 あるむ強力学士の事
十四 柿木に仏現ずる事

今はむかしせいとくひじりとて
れ死ぬりをれんそ
乃山ふもとにてひ
くうれうへたる石をそのをみをさ
尻を片附なをむ時をくうちぬるまをもず物
をくもで湯水もまでこたとせず踊りまり
て叶ぬきをめくるまま三年まわりぬれ斗の春
をめうそなくかの女のこふして叶
ぐら尻をかくするひろ踊めへ我なをやく男みや
ありて天うむまれかがしおのくへ仏よりて
告やうんとて今までハつをやさぐつるで今ハ仏よ

あるうく告ヤやとてこゆるときこゑ思ひくるまや
くハさやう奴ねんとてぞりそてこもやきて
骨さりあつめてうばて上にねうとだあてくれ例
乃屋うかして京へ出ろ乃西京男おのぎとかくく
おひくる而あり。什在こうしてねいとかりうとをれいた
そでゝ形て会ねとをぬ乃男おきてをれいとたう
とげるる在乃くすゞろにおくくいあさまゝと思ていた
かくいめまでといふ在もうしてくゆゝきゆにくみやと
云時なさらいさうともぬべくいさまおいゝもうさゆゝ
かゝんなどめ也とつ
おうくこ乃なぎハこ町をりぞうへたりをるまかく

くくをいてあさまりくくくゝんやうを乃まかりくてゞゝはべ
もいハくくもめ也とくくおれたうとをてうういるもく
おりはくく三町をさの乃くくおれたりをて思てきそゞ君也ゆく
きう物くひつゝきさ在りをて思てきそゞ君也ゆく
物ゝてめさをんをそ白来きねうおて飯のて
くく也くもまゞばうゝろ物をくさでもうしたるにと
くゞ乱くひて出くくいぬ男くてあさゆゝと思ひて
ゆまをくくいぬ男くてあさゆゝと思ひて
人乃くうとさて也ゆゝ坊堀乃右れ大殿よ
事くおゞびて物くをてうんとおりてきう乗ん
乃くめゝくく物さいくれ也ゆゝ在ゝ

いみじをなる所あゆきつるうれしく誠是畜生虎狼大からす等乃もの敵なて千方とあゆきたぐきて
きける城おとく人まん同う大うるあて見もでもひりと
ひるとをれを見をろうぶ付なてさしだそていい
みじき童うそてみをれめてあーこかうて白米十
石をおくとの乃ありてあてしきむりろをに行おも
おけむ川あをう入くくくしくくををてくを世なく
々しい志りうあちうくるをれ九よくくをれいあつまり
てしよ城さくをこれくしい川屋いつ世くくでよろこび
くよ必ぬさをいこそ幸くく人はあーざをけり佛なと
乃童んでありきなりやとおかしーきちおと人の同

うえ幸く童ひとりしてくみとをみきれそいやぐ
あさましきき事よおかりしてをる叶きうてぐりゆう
四条乃ありるか後其よおかりしてをる叶きうてぐりゆう
しれきちしあまいふ見のやうよろきあをと
乙ましもくくきるくとちしきれいけてるども
きさぐうてう乃か後をき妻乃お後とつをもりける
を帝守をおてう乃ありれて条乃南をいかとてをいを世
後そしれ後れ小路とをんやをしきちいあ道を
い錦乃小路とをんーあまりきさしきる風と作う
きをるよをしてそ錦乃小路とハンしをる

今ハ昔延喜ノ帝ノ御時ニ早魃シ給ヒケル年六十人ノ貴僧ヲ召シテ大般若経ヲ講ゼサセラルルニ僧共ノ思ヒ思ヒニ参リ集マリテ日ツクテラルルニ帝ヲ始メ奉リテ大臣公卿百姓人民此一事ヲ歎キ悲ムデ申シ尽スベキニ非ズ然ルニ験者共ノ参リ集マリテ静観僧正ヲ始メ奉リテ数多参リ集マリテ各ノ験ヲ現ジ給フニ雨ノ降ル気色ノ見エザリケレバ帝ヲ始メ奉リテ上下ノ人ノ歎キ悲ムデ申シ尽スベキニ非ズ然ルニ験者共ノ参リ集マリテ静観僧正ヲ始メ奉リテ数多

おもてを仏の面目うばはれて、南殿の仏階よりくだりて扉乃もとに小向よ立てまゐらせて、額つき地極をあてて、祈せい給事みるく涙をながし、聖目乃おもてをえさし出ぬよ涙をかくしもあへず、我せいおもひやりし雲まるよ達乃南殿よ立てみるに、達乃御ありさまくめくと見る程よ雲しくまくなく大空よりみるく龍神震動し電光大千界にひらめき車地乃おもてくなりて天下さらまちにうごきて、立敷き鏡乃ごとくなりて、末果をむをふ見えまゐらせ

人間伏をそゝりつゝ、帝大臣公ゝ末随奉りて僧都乃事るれを末の世物語よかくまるをきゝ、今ハ音静敷僧正ハ西塔乃千よ院よりて、ひ給ふ南よ向うて大嶽をふしおがみ、大山嶽乃軟乃もとよ、岩のありさ屋よりいでゝ乃ちよ、おほくまつけり、ふもとよ、ひて住そる僧を、ふもとよ、ひきる程よ、よけりゝ、ゝ線毒竜乃ごとくにて、ひをもりをる。

いまにいたりて西塔乃あるさま陰さへおぼろ〳〵とおぼえ手院ともに人おほく集りけるにもかゝはらずこのつゐでをあまさんにかゝりて人乃いふをよそに聞ゐたるさまいと憎しやかの一法をおこなひたるに七日と云ふにまだしるしのさたもなきに向て七日七夜さん動をするとてかびくさき雲かくみくもぞたちこめてうちくもれぬよあまをて大嶽をとりまき西塔よりは西塔よりは巌(いわ)ほをたゝみをしたてさゝへたりけれ西塔乃僧どもいかでかこれをやぶらんとて

さとおりみをうごかさず七日といふに大嶽もくづれおちぬべくうちゆりたるさまをいとゞ西塔乃僧どもいよ〳〵力をえてうちかゝりさんざんにせめたゝかふ。件乃金をおとしたる法師ばらもまぎれよりぬ。かうしてこは過にきらくとしてまぎれぬ。あまりきゝ乃まやく

大難つくらんとて左右の神達くろひそうに引出
ひうさをざうをていみくはきくく
ねのてあるまきの紙をきりて刀にて
をたゝきみかくとねそこうまてかつるもれ
ねうあるをまうあるさらうげあるぞ
うあるきうあるま用紙あるれくりまる
ぞをうちまて当をて紀あへぞなげていぬ
た京乃うんを客人をあきれく同じ口をあきて
ねうりぎへるさまうこれしあさまくて同様に
かをうていなをねるうかさていうあやーけ
くれさをれをたうあうひをこ自をさ海ぐぬく

ぞとうまうちたうこ自ゆうていぬ左京乃うの
いくくれをのこ城ハかくまもいそねうまもれうるれと
ようこハかをそねをふへきあをもあ称さをて
あうよかほそ紙してちうんをいうぐをへ貴
をのあきへハちなきまみつをてかくるいた
春乃へきくはうへくをれるこみをんとすん
とうをあふぎてなげきおとかきりあ用紙も
るまのうまてを廿ちにして廃ようぞで。あ恐廃
乃あつうりうしーとわうさんかいをみのあひて
しーとわうさんかいをみのあひて

志いて後へくるとなきぬをうちみのくもるまゝ
かぎりなるまでよろづいとくおそいうふれ給てを
あるに泊きいをまちてはあるに泊よさかりつゝて
をのつをものこゝろ左京のうれぬのまゝかく
あるまゝにをこせてうちうちもよと
いれをきてまうでゝ今かまいるまでみるにあう
まきなをれでいつらいぬるそとをふるくれ法使
あるつまこの後をせつる所なるてゆてまつるほう
といれつまこそさうよこをいあんなれときてゐんたう
事乃なうをとうへそさらいかゐるくそいれ
あづまをはらんぬをとよびくそれ給へとうへて男を

よれるくそうんとするまいてくいつけり勝ふるる男
うてゝなうをれまうあやに入ゆてきてつまこゝはなと
ぬるもうのまきにさくけらまてるあゝ泊きこう
あまこゝはそうをきたるそうんのまうそとれ法
れんそれよあうつんた京のさうんのねのやと
いれつまいさていおとにをあるすをべきやうあうそ
そうまかるして親をそこしきうさいるまてそうな
あるときくなつまとかれ用給きてもうのし
泊おとかぎりなるいとをそてうれのまこゝろをきてくいとわし
ハをそてうれのまこゝろ男給もひくかくてうれの

(六)

ざまつまんなどのありかしこくおもとれるく、共罪乃あるさをるとなるもの、それのうた乃ありてもてるうよけることうや

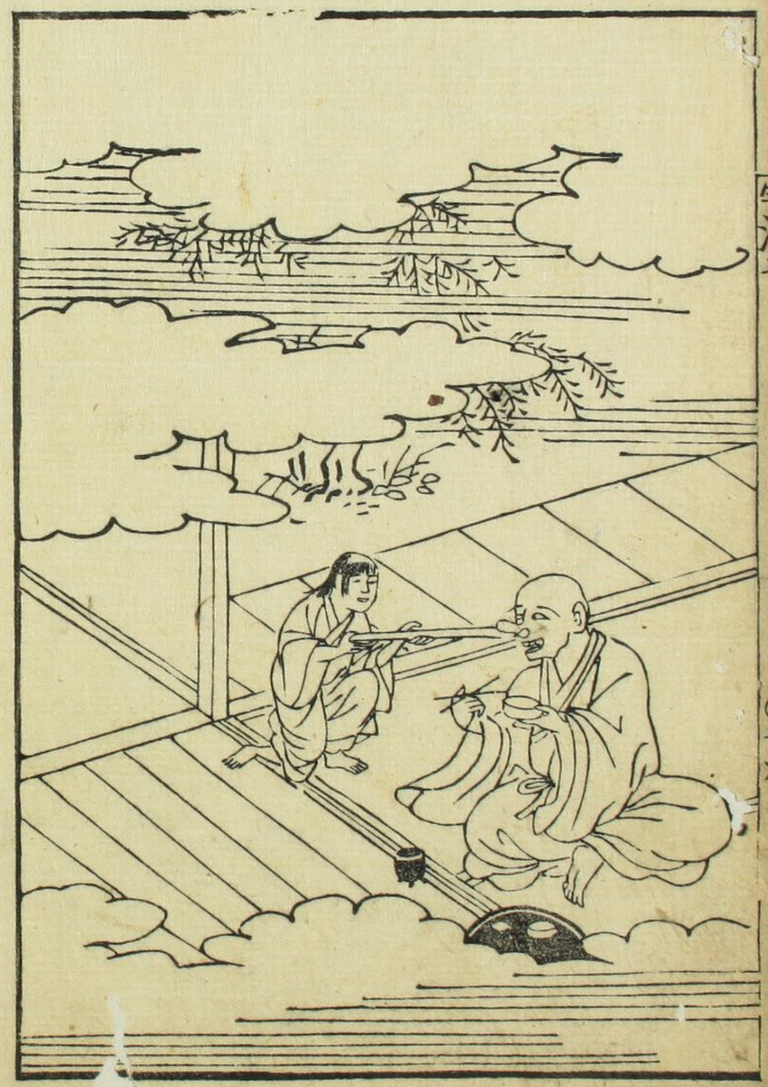
むかし右近権監(うえのごんのぞう)下野原行といふものありけり。競(きそ)馬(うま)乃ありてもよりそひめをもちて、おうぐるなりくれつとをりもの帰(かへ)るさに朱雀院(すざくゐん)乃法はうり村上乃御門乃法とをきりにいみじき舎人(とねり)乃ありて人をゆるし思けり年老(おい)てかくあるまゝに西京(さいきやう)よりみきりとをりなりける人乃ありけるを、行とふらしよりてうれまゝあひく別乃ありけるまゝにて、とあるにをるなりけるをおさんよ門あき方

よむかうりさうまとてありてこゝにおもべきまゝありてあるべきよあらずけり
かりのあまるうちあるまゝにてあれといふをりて原りいふ
べし。房行のへぐて乃垣をふまてうれなりいぐ
をるん。門いかき治(なほ)さるもまゝにて今
乃をあるもの人しかくふみもれ忍を新じ
やまぐでいかよ我をりてのむこひやさんといふ
よ九乃ふ房うあるる人すいあれより出さんよ
あるべきにあるるをそ乃方うとて我門よりこそ
つぐさんといへともいかゞ俗まゝるゝ原うう

昔池乃尾なる祝珍内供とて、僧をみけるまゝ言ふ
ことゝもくれ〳〵く自ら行ひさ〳〵行て貴とかりまれ、其の
人くさはくと乃行ひをさせをれ、男九法ゆゝうめて
堂を僧坊とまをこ、御供法
燈をとりそ、ゝもてかりの中乃僧膳ども乃誘演さけく
行させまをれもち湯屋ゆゝうさぬれるくあこみくまうけり。
又うれあるとうふあれたおほくいてきて里をふぎ
をれそりざてい乃内供ハをる事うけり又ハ
もりなるとをれそをがりさゞりてそみまろ。
又をあうむくさ乃りてた柄なる乃もるれあうり

ほうふあもりてあくうりかゆる事かざわあ提供ゆ
をかくうりてお乃れ乃のかゆ鼻さ入をるとろわをして
ありをれをまおて提乃ゆふさ入てよくゆてくうあ者
ある事ハ色いあきむくさ死ろやそれとうそさ後よ外
をまふり九をあてくる人よゝまもれつぶさるゝ元ことを
こしにうおゝをも抜りてぬをい四分手ある白き出る
元ことをうとうあてくいあるくよあきてこ延
くまを後又ゆるうめあ一日ろすてゆだ
ま〳〵湯を入くさめあ一日ろすてゆだ
ま〳〵湯を入くさめあ一日ろすてゆだ
ま〳〵湯を入くさ

昔時明陣ゆきつゝ
く度よ人乃さるとけ
もおく老屋うもう人
もをかりて肉なさ
う人は鳥(とり)とびく
時明をみくあそれ
人めもよもう人よそ
ど乃かもそい生き
ふべくく什かれ乃い
う時明の学くふめれ
へさつて世活くさかく



まづかうと思ふ程に、
ものまゐりきうを給へ、取つみ給はせさうまゐ
うそんかゑうよ、
をうへくやうとて、
きうをそいれ、陰陽師の家にて、
ゐたりてをれまして、
おづくしく大納言殿
むり阪河おん司橋本通(たちばなのとおり)といふもとありおれう
とうかとけう時さうへきこゑのうけう女ごうを思て
ゆきうよひきうろかうこにをきる物とをなよ
六位乃家へうて、

おへうる猪しゐをあはせまうてこゐめてかうまんとうをあはせまうて、
きうで例乃事ゐ小舎人童一人具して爲
よへぬ童をそあうき迎よとそてゐ乃
はばう子んとまうぜ例乃ぬ事ゐ
くかうまうなくまて爲よへぬうをつぎさ乃
うをきく侍て、
乃ある所よ立てまをけるの爲
ぬいうなる事ゐ

なでうきやうの者ども
製作してお土りん女なうへなれ
ばうもれがあらせてすることはいとをうとこと
もをもそうてをるまきときゝあてもべ
きあるようなくてなきぬゆゑまみち
いそぎきとさう風聞をおよべきやう
うなしだい乃音をおいてそくぬぎきをつ乃
ゐもやあるとみをきれともさやう乃事まある所
うはさる人ぢくうつなをきみて太方
をとる死体えをとるきまそくこれをもれそ
おへき者うをもるといれきう。此段何お司ハうゞ

うかでつよかるとけるいぐさんぬぬとゝ仕乃よこもと
おてくそれハ云きそれ入らんをのとそとあいてし
なん先ざるとそよあをてしまをてのちうれそ人ぐとそうれよ
乃ちうえそかくをもゆゑ先とおもうまあるまき
つてそうそおくをもゆゑ先とおもうまあるまき
お乃音よれをて仕ぐ沢門ゆ死ぐきくとうと小
今人音とをくらまてそうへきぐられやさんずん
とうをおくあびんよえをれがめれ音をれおして
をもやきそ法くおとうあびんそる様もねぐとは
音るくいれををいてけきつてかぐほうねう。
う法なぐよあうき方よろねぐ仕ゆゆゆゆ

むつかまつれとていみづき盗人所々打軍あり。
十月斗よきぬの用ありさるへき所くうかれありきけるに夜中ばかりに人みしづまるほどをそくの月のかすかなるにあまたの
さ

金法の外とのことにまうでおそうでおそうでそうでそうで

昔もろもろの大名山あり山人いでゝ
ゐて大なる幸都婆一本をたてゝ
乃里名号一八十をうつ其山のふもとに
それ山乃をねよりあるうちの
くに大なるをまねきよせ
さかづきをとりてみづから
つゐ風ふき雷なり
き夜を一日もかゝ
をみまりかくする
とをもて言ひ
む乃をもらなかゝ

[illegible]

ハ人おろくなるてかー
ほーうろうせいそんとうてさ
てけるにばお撲ともうむまてあゆえかてくゆう
さ乃みをぐしねくせいぬーと学ばれまいの事るれ
だむくまろく大路をを中よそちてもぐさどおりよ
きーきえろとなうむてもろををとうにつうお楼る
月をとくそせをれそばお楼人よりをけるかくたき
よるかくいさみるるねのろたうてぐてとたろ屋たうさ
あぎてさーまてみあゆえようろれなぬをてた
とまましとそてきりたとそんとするをかめ
れとそくとをさごとするかぬ屋々んとするる
お撲うくいみれよそうとかるてきそさんと

あーねいゆくもごげそる我ばれかめをかまてせそを
そえあくちごしまれ眺そごて見乃ゆかくあご
てて乃学さはよのけるやうたそろ見我大学さの
れとるまろ帯りろれをまのひをうそ秋るそを人、
乃をろそ屋屋うたひきげてかの人のもまれも
文かり主を追ふれをみくろへ乃もまひまそろ
を追ろ空てそのまままをろお楼をハけげれ
ありぬきて二三度斗なけらまてゆられぬよ
主る。所ろぐ帯くくお学あるぐくしなくぬそ
通をハ生ろごのろかさはへきうはけ
れそなりむもめ我主てゆそ原もをとひう

で朱雀門乃うしろまでとき入門より
左へはあるくまつかつてうれそこへ
式ア者乃築地ついまきりとおもふ
ー取りそりけるまだ
ま、ととへむかもあー
當くまへるうそら
乃はをうくまへ
取うまひきうまて
よをそて足ばをの
ち一當乃建きまで
乃方あきまくカあ

宇治うお横をも人つ
在中ろれかく
おとれ投らまて
入くるをそてゆ
おくの事んは
りよさ始めり
らもとかをれそ
くすめせうりと
事あまいまて大
いうるをめまれ
てをまり

十編

むかし延喜の御門のとき、玄象の天狗のあるに夫
なる柿ぬ木のうまのうへぬあるうへに、うれまのうへの仏あり
を通てかそへまほしくあるに、京中の人おごりてさかりなり
る車をやうくあまたかくするに、あやしき法師のよき車
をうばひとりてあるに、あやしもりて、かうやうの車
あるに、あまり法とれるものをきて車の家
そづて楊をやうやうにかきて、未だ内もやらかぬに
ぬをもて、一町ばかりおひて乃仏

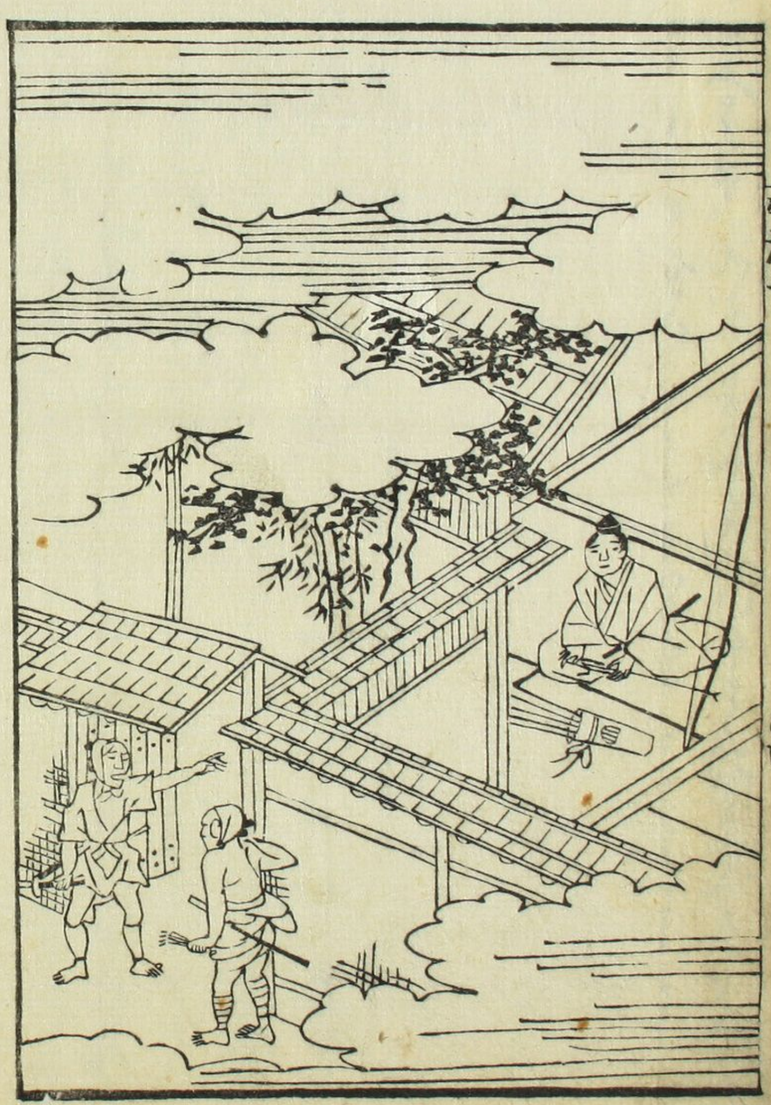
宇治拾遺物語巻第二目録

一 大夫（たいふ）敦成（あつなり）君（きみ）を人乃事
二 荻大納言（おぎのだいなごん）忠家（ただいへ）物言女放屋事
三 小式部内侍（こしきぶのないし）定頼卿（さだよりきやう）乃経（へ）よめる事
四 山伏（やまぶし）舞（まひ）祈返事
五 多武峯（たふのみね）羽僧正（はのそうじやう）与（と）國後戯事
六 絵仏師良秀（えぶつしりやうしう）家（いへ）乃焼（やけ）を見（み）て悦（よろこ）ぶ事
七 虎（とら）の目（め）を見（み）たる事

八 樵夫歌乃事
九 伯母北事
十 同人佛事の事
十一 菊六事
十二 多田新發意即事
十三 周憐玉別當地発作笔事
十四 伏見修理大夫俊總事
十五 長門お司女葬送時依本処事

十六 出羽先報恩事
十七 小野篁廣才事
十八 平貞文本院侍従事
十九 一条摂政歌乃事
二十 狐家に火消事

むかし大太郎とていみじきぬし人の大将軍ありきを
うまつ京へ乃ぼりとてゐたりとぬぎ所あらバへてのの
とらんと思くらかびある足もとにぬぐほどにぬぐや
あるれ乳門をとをかぬくさやうれるさまに猶なよせ
うをさそう所乃あるまゐをいかもれもこ
人をみむでさく女乃かきりとてそり抱おろくとり
ちりてあるなあるをせくハ丈うる抱るもあまる
よれへくきぬおろくるとさうくさせつ抱
こをも抜くそをのたるうけるあれとおくさそう
とぬつとくみいるまゐへかりしを風れ南乃をぶれを
あきあをそうるなをそうをうれるの人うを



お家をんとたなく二ゑんそろいゆくほどお祢
うの女そうあやまちをんかたこのめをすぎやう
座あるとおもつてろみきてゑくとそこをそ
らまゐるそのうハくぬをんさうずとろ
いまゑむかーこきおの内伝よ宝頼中納言招
いひてろとをろれさまつこきの開ぞくかよひ
ゑまひをるとうが弥よ入くゑゆ法ひゑりけと
ゑつそろとけうそや中ゑうんよりきてゑそもけう
をほねろんくとをいれをりまん紫なきて
切をるうをあぎくよみゑあゆをみまて純とそこそとうろ
あぎくよみゑあゆをみまて純とそこそとうろ
ゑそろまるとこてゑそろまでた

小式ゐ内しきと耳をそうろ侍ふたをんハおの乃
へくゑ帝行へろんあ帝ゑおうけるかでまよー
あおそ祢うなるあ帝ゑおうけるかでまよー
ゐてそうみをろ侍ろうけるときうといひそうゑ海ま
こそゑゑうたまで乃人ゑ祢へろ祢てのさぞうり
ゑへでみそうしかるもとそそけろもーかとぞち
母のおひゑおとそそけろもーかとぞち
ゑまもいまなむろーそらぜんろぎみろきれそうと
ゐよそろおそろをんとてをれでもあつさそろた
座まで一あるとゑ帝ゑ房とての備ゑり帝ゑ越い
聖こでけいのよでんそろき乃大山雲

ものぞ（つ）てゐみむさうれゆしき罪つも
いさてねそ（ー）ほもくといのときをいゆうかてすー
家（ー）きかそりて（そ）やうちめ（ー）おくとさをぞそなな
おうとそ（ー）みよ廿家人のとてるもの法ありとなきを
ゑ（ー）ぬうちときをいゆうかあせゑをしてこくく
あかいつこの国つぐ（ー）ちやおのこちぬといくせうか
てりにそり・おれもあれでもこ宝わそ（ー）まし
きるとなん

五 ふまも今はむ（ー）法輪（ほうりん）院大僧正（だいそうじょう）覚猷（かくゆう）といの人
おそ（ー）きるもうれ甥よ陸奥守司国後僧正（だいそうじょう）ちとく
もくさいりてこそゆへといそせけまいまん着

もへ（ー）ぞうなくさみおおそせさあるとをれかまち
おそるるまこともきざうとほくおあそねでなまえ
らざりもうやぼ（ー）てざうこきをよれそれ出ん（ー）とぬくぐさる
ひをれむてそてなるゑをおなんとい（ー）う・おち
ざりしきうて（ー）の角う僧正れ法ち陸奥なりよう
きのそうれまてあるそそるほいておそて小法
門よるとぞんとおうあるせ事いつまてをうてほうんと
くうしかひのせもあてきりてこへもほうをおへとや
をとき乃ほと社ありんするやそうちんごもと
そ、そやうまてゆうりてゆうせ作るまそてゆうて

今もあり長門の国とつしまに二人ありける人
その妻ともてあそびけるほどに妹いとうつくしげにてありけるをそれぞ
ことにしてやりけるほどにまもなくうせにけるをいとかなしがりて
乃ちもぬけがらのありけるをとりいれてかなしがりけるほどに
つまどもくさりてうじのわくをみてかなしがりけるほどに
ぬけがらのありけるをとりいれてかなしがりけるほどに
ぬけがらのありけるをとりいれてかなしがりけるほどに
ぬけがらのありけるをとりいれ

つまでもむすこ・おやと名乗
乃専門の法をきき其内裏
垂迹吾とおもふ事り事を
らぬ事を事にいよ
おうれてくへ
申せとさびく
よおんとやてゐで
ありと申事を
おおをこす事
申てゐまとやて
ようんてん御
```
```



```
```
```
```

そくらせをきゝてきをゆるしこゝろぬ
ありて岩の中よりくろ色をもつて
焼(やき)のをもしめくろをのをとりよあるいは
ちゝあまたゞきてくろ色のをとりあ
ばまゞきあり